

海外巡回健康相談レポート

-マニラ相談会を行なって-

東北大学病院/弘前大学病院口腔外科
萩野谷 大



はじめに

巡回の舞台は日本から飛行機で4時間半、南の島国フィリピンのマニラです。マニラには約1万7000人もが暮らしていて、その数は経済発展と共に増加しているそうです。フィリピン-急成長する若き大国-から引用すれば、

—かつてアジアの病人と呼ばれたフィリピン。近年、サービス業主導で急成長し、経済規模は10年強で3倍となった。人口は1億人を突破、平均年齢は25歳と若く、アジアの希望の星とも言われる。一方で、貧富の格差はなお深刻で、インフラも不十分である。

と説明されています。そんな若さと活気に溢れる国・灼熱のフィリピンにて5日間の日程で行なった巡回の様子を報告させていただきます。

自分の口の中を見るところという経験から得られるもの

マニラ日本人会での歯科相談会で二日間、一家族につき 30 分から 1 時間程の時間で歯科健康相談会を実施しました。参加した方の多くが、小学生以下の子どもとその家族でした。自分の口の健康に無頓着な親でも、自分の子どもの歯は大事にしたいと思っている様で相談に来てくださいました。

相談会では田中健一先生のご好意によりお借りしたイントラオーラルカメラを使用し、口腔内をモニターに映しながら自分の口の中を家族と一緒に見合っ診察をします。この機材の使用にあたってのポイントは添付写真のように、モニターをみんなで見られるような配置にすることです。また気になる所では撮影機能を用いて親に説明します。歯医者に対して恐怖を抱いている子は少なからずいましたが、このカメラを使用して子どもの顔をモニターに映してあげたり、親の口の中を共に見る事によって、子どもたちが遊んでいる感覚でとても興味津々にお口のお話を聞いてくれました。おかげで協力してくれる子が多くなり、泣いてしまう子も 1 組だけでした。また、自分の口がこんな風になっているのかと驚いて写真を撮って帰る方もいらっしゃいました。



海外赴任の方に負担となる医療の格差はマニラの医療のレベルとしてではなく、言語の壁によるもの、外国での歯科診療を信用することができないといった理由から歯科医療から離れているということだと思います。歯科のような専門性の高い英単語で説明されて理解できない、また何となく削られたくない、だから次の日本への帰国日まで歯科を受診しない。といった方が相談者として来られている印象でした。



フッ化物入り製品の多様化と選択

オイスカマニラ日本語幼稚園では検診とフッ化物塗布に加え、保護者に対する懇話会をさせていただきました。非常に沢山の質問をしていただきまして、その中でも特にフッ化物についての次のような質問が印象に残りました。

『私は子どもにフッ化物を歯医者で塗ってもらいました。フッ素入りの歯磨き粉で磨いた後に、フッ素のジェルを塗って、フッ素のタブレットを噛ませています。これって正解ですか？』

近年フッ化物を用いた歯の予防が当たり前になりつつある中で、その手法や製品の選択に悩む方は多くいらっしゃいます。また、それが過剰であったり正しい理解の無いまま用いられているようでした。きっとそれだけ予防に対するの需要が高く、情報が手に入りやすい時代だからこそ、錯綜する情報の整理の時間を提供する必要性を感じました。



医療に恵まれないとは

僕は大学生の時に、スリランカやバングラデシュなどで無医村地区（いわゆる伝統的な歯科医師ではなく国家資格を持った歯科医師がいない地域）にて歯科健診や歯磨き指導、お口の健康の啓蒙活動などの歯科保健活動をしてきました。それは目に見えて明らかな、医療に恵まれない地域に住む人々に向けた健康と福祉の援助です。それは小学生のころに憧れた、人種を越えた海外医療支援の形そのものでした。

しかし今回の巡回では、海外でご活躍されている邦人に対する医療支援でした。僕としては、国際歯科保健活動に対するパラダイムシフトで新しい視点で、海外赴任という形で邦人の医療格差が広がっていることを実感しました。

対外関係と、ライセンスの壁により海外では歯科医療の全てを提供することは難しいですが、これからもできる範囲で、医療に困る海外邦人の幸せと豊かさの向上の力になればと思います。

